

「東京新聞」に連載されていた木内昇氏の『かたばみ』が単行本になって出版された。秋吉家の家紋が「かたばみ」と聞いていたので、読んでみる気になった。「かたばみ」は、どこにでもある雑草だが、繁殖力が強く「家が絶えない」に通じることから、江戸時代によく家紋に用いられたそうである。花言葉は「母の優しさ」「輝く心」とのことである。

主人公の山岡悌子は、子どもの頃から「男女（おとこおんな）」と言われた大柄で、逞しい少女であった。岐阜から単身上京し、日本女子体育専門学校に通い、やり投げ選手としてオリンピックを目指したが、東京五輪は戦争で中止になり、体を壊し成績も伸びず、断念する。西東京の小金井の国民学校の代用教員となり、近くの総菜屋の二階に下宿する。学校では、軍国化方針に従って、強い少国民になれとの教育を強いられ、子どもたちを教育するが、納得できないと思い悩む日々を過ごす。また、米飛行機の爆撃によって、教え子が死んだことに大きな衝撃を受ける。彼女は、幼い頃から家族公認の仲で、早稲田大学の野球部エースで活躍し、社会人野球に進んだ神代清一と結婚するつもりでいたが、彼は、悌子の同級生と結婚したと言い、出征していく。彼女は悲しい失恋の痛手を負う。下宿先の家主・朝子は夫の茂樹を戦地に送り出し、姑と実母と二人の子どもの五人暮らしだった。そこに、兵役にも取られないひ弱な兄の権蔵が転がり込んで来る。食糧難、行動規制、空襲という戦争がもたらす苦難に耐え、下町で育った家族は下町風の賑やかな家族愛を生き抜く。悌子は回りからけしかけられ、頼りない権蔵と結婚する。権蔵の収入は悌子の半分くらいだが、時流から外れた生き方を強いられたからか、社会と人間を的確に捉える知性を持っている。彼の事ある毎に、言葉少なく語る一言は真理をついている。

戦後、朝子の夫・茂樹は片手を失くして復員して来て、朝子家族は喜ぶ。死の恐怖に怯える戦争から解放され、大家族になって、食糧確保に苦労しながら、夫婦で小さな食堂を経営する。悌子が恋人と慕っていた清一は出征し、戦死し、一人の男児・清太が遺された。彼の妻が再婚するに当たり、相手から子どもはいらぬと言われ、悌子に預け、育ててもらいたいと岐阜からやって来た。あまりの身勝手な申し出に、悌子は怒るけれども、受け入れ、夫の権蔵も承諾する。夫婦は清太を我が子として、可愛がり育てる。清太は優しく、逞しく成長し、地域では知られたエースピッチャーとなる。悌子の父の葬式で岐阜に帰った時、生みの母が清太に会い、涙ながらに抱きしめる。その時から、清太は自分の生に疑問を持つようになる。悌子、権蔵夫婦は悩んだ末、もらい子であることを正直に打ち明ける。清太は動揺するが、育ての親の愛が、彼の心を鎮め、家族の愛の中に落ち着いていく。

戦中、戦後の混乱の中、家族は助け合って生きていく。血のつながりのない子を我が子として、愛情をもって育てていく。家族のあり方が問われている現代、支え合いながら生きる心温まる愛の物語は読む者をホッとさせる。悌子に「かたばみ」の花言葉「母の優しさ」を投影しているのであろう。確かに優しく、力強い母親である。私は、夫・権蔵の言葉と振舞いに「輝く心」を見る。彼は、妻の悌子が怒りながらも、清太を養子として受け入れたことを、「うちの子にするよりないだろう」と認める。そして、清太に、年若い子どもでありながらも、人間として関り、扱う姿勢には感動する。清太が養子であることを告げる時も、「清太が他から漏れ聞く前に、俺たちからちゃんと伝えたほうがいいんじゃないかな」と冷静である。清太を愛した自負が、この発言になっているようだ。時代の風潮に飲み込まれなかったから、物事を的確に掴む「輝く心」を持ち得たのではないか。